

平成30年白老町議会総務文教常任委員会会議録

平成30年 5月22日(火曜日)

開 会 午後 1時30分

閉 会 午後 2時51分

○会議に付した事件

所管事務調査

1. 循環型の地域社会づくりの現状と課題②
 2. 総務文教常任委員会の年間予定について
-

○出席委員(7名)

委員長	小西秀延君	副委員長	及川保君
委員	大淵紀夫君	委員	吉田和子君
委員	吉谷一孝君	委員	前田博之君
委員	西田祐子君		

○欠席委員(なし)

○説明のため出席した者の職氏名

生活環境課長	本間力君
生活環境課主幹	後藤田久雄君
生活環境課統括主任	今村吉生君

○職務のため出席した事務局職員

事務局長	高橋裕明君
主査	小野寺修男君

◎開会の宣告

○委員長（小西秀延君） これより、総務文教常任委員会を開会いたします。

（午後 1時30分）

○委員長（小西秀延君） 調査事項ですが、前回と引き続き循環型の地域社会づくりの現状と課題ということで、本日2回目になりますが進めてまいりたいと思います。

本日のテーマは大きく3つ用意していますが、まず1番目のごみ処理とリサイクルの状況と展望ということで、追加の説明4点ございますので、担当課からの説明を求めたいと思います。

本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） 1の（2）から（4）の項目と、前回この4項目と関連しまして焼却灰に関して前田委員のほうから関連のご質問がありまして、中間なのですが資料2-1をお開きいただきたいと思います。平成27年1月26日、30日、2回に分けて、一般廃棄物最終処分場の民間施設の活用についてということで委員会協議会を開かせていただいて説明をさせていただいております。その中で民間の産廃業者さんが所有する処分場を27年度から活用しまして、資料2-1に中段に記載しております、27年度株式会社ケイホクさん、28年度株式会社マルトラさん、29年度株式会社ケイホクさん、今年度30年度につきまして契約がもう既に締結しておりまして株式会社マルトラさんのほう受けております。記載のとおり処分量が平成27年度668.4トン、金額1,425万3,689円ということで、以下28年度、29年度大体600トン台、約700トン弱の推移となっております。順番が前後しますが、参考までに上段になりますけれども、最終処分場の今の埋立容量を記載しております。28年度末の取りまとめでございますが、埋立残余容量につきましては591立方メートルということで、これにつきましては累積の数字になっておりまして、実際埋立量が27年、28年につきましては200立米なのですが、実測地の計算上、大体この部分よりは水分等の減容、また埋立部分が若干埋立量が落ちておりますので、591立米ではあるのですが、まだまだ量的にはもう少しふえるということで、今年度も実測値をもとに修正をかける予定でございますが、公表上、配送方のルールに基づきまして公表している数字として、まずもって591トンということで、いずれにしても早い段階で埋立量の修正はしていくような形を取っていきたいというふうに考えております。参考までに1番下のほうで焼却灰等運搬業務委託ということで、(株)ミツバ公営企業さんのほうで3カ年分の実績を載せさせていただいております。以上、簡単なのですが、先日の質問に対しましてご説明を終わらせていただきます。以降、レジメに沿って担当より説明させていただきます。

○委員長（小西秀延君） 後藤田生活環境課主幹。

○生活環境課主幹（後藤田久雄君） 私のほうから説明をしていきたいと思います。まず資料についてですけれども、追加資料ということで、まず（1）事業者のごみ処理対応についてということで、これは資料1に載っております。それと（2）リサイクル率の目標30%の具体的取り組みに

ついてということで、これにつきましては資料2と資料2-1に載せてございます。今、この資料2-1につきましては、本間生活環境課長のほうから説明があったとおりでございます。(3) 生ごみの堆肥化の展望についてということで、こちらについては資料3、資料3-1、資料3-2で説明させていただきます。それと(4) ごみ処理量についてでございますが、これは資料1の(2) 家庭系及び事業系別収集量のほうに載せてございますので、それに沿って説明させていただきたいと思っております。

それでは、(1) 事業者のごみ処理対応についてということで、資料1の食品残渣量、こちらについてはダイエットクックとライラックフーズを載せているのですが、こちらにつきましては産業廃棄物として苫小牧市のほうで処分している状況でございます。平成25年度が約624トン、毎年ふえているような状況となっております。平成29年度で1,027トンということになっております。この資料にはちょっと載せてはいないのですが、これは聞き取りで調査したものなのですが、その他スーパー等で生ごみなどを出しているのですが、ちなみにコープさっぽろさんでちょっと聞き取りで教えていただいた数字としましては、29年度の生ごみが約42トン、そして不燃ごみが25トンということで聞いてございます。以上が資料1の説明になります。

(2) リサイクル率の目標30%の具体的取り組みについてということで、こちらにつきましては資料2、本町の資源回収の区分数としまして区分数7という形で上記のとおりとなっております。その下のほうに28年度のリサイクル率の高かった市町村と、その下に胆振管内の市町村の区分数について載せてございます。現在、本町における資源ごみの回収状況は、前回1回目に説明したとおり、カン、瓶、ペットボトル、紙類、古着、古布、小型家電、鉄器類などを回収しているという状況でございます。これも聞き取りのことなのですが、前回商店などで回収しているという数字がちょっとつかめていなかったのですが、こちらもコープさっぽろさんとスーパーくまがいさんの数字を確認できたのでお知らせしたいと思います。コープさっぽろさんにしましては、平成29年度、ダンボールが約72トン、空き缶が0.5トン、牛乳パックが0.8トン、発泡トレイが3.5トン、ペットボトルが0.1トン、廃食油が1,700キロリットルを回収して、コープさっぽろさんにつきましては、札幌市のエコセンターで処理しているということでございます。続いて、スーパーくまがいさんのほうは、発泡トレイではなくて白色トレイのみの回収で、白色トレイについては0.4トン、ダンボールと牛乳パックを合わせた回収で25トン回収しているということでございます。白色トレイにつきましては、札幌市の大丸藤井というところで処理をしているということでございます。それとダンボールと紙パックにつきましては、登別市の三協資源(株)というところで処理していただいているということでございます。廃食油につきましては、(株)白老油脂でやっております。毎年約1,000キロリットルを回収しているという状況でございます。今後の具体的取り組みについてですが、この資料2の上のほうにも言葉で書いているのですが、リサイクル率30%の達成のためには、資料2のリサイクル率の目標30%の具体的取り組みとして、さらなる分別の徹底と、事業系一般廃棄物の減量化を図るということで、今までもそうなのですが、今後広報とかによる啓蒙・啓発、出前講座などを積極的に取り組んでいきたいと思っております。

また、ごみ収集カレンダーなど見直しをかけてよりわかりやすいような状況にしていきたいと思っております。また、今までリサイクル率に反映されていなかったスーパーなどの資源回収の実績を把握することによって、今後リサイクル率に反映していきたいと考えてございます。最終処分場の関係につきましては、本間生活環境課長のほうから説明がございましたので省かせてもらいます。

(3) 生ごみの堆肥化の展望についてということで、こちらにつきましては資料3、美唄市の生ごみ堆肥化施設ということで、その概要の説明と、資料3-1では平成28年度のリサイクル率の道内トップであった豊浦町の漁業系一般廃棄物リサイクルセンター、そして資料3-2としまして洞爺湖町の生ごみ堆肥化処理施設の事業概要を説明していきたいと思っております。まず、資料3の美唄市の生ごみ堆肥化施設については、なぜ美唄市かということ、美唄市と白老町の比較ということでもございますとおり、類似しているというようなことでこれを参考にさせていただきました。美唄市の生ごみ堆肥化施設は、処理能力としまして1日7トン、工事費が4億1,000万円、現在の年間維持費としましては2,000万円がかかっているといった状況になっております。あとは資料の中で構造ですとか書いてございますので、そちらのほうを見ていただければと思います。それから資料3-1、豊浦町の漁業系一般廃棄物リサイクルセンターということで、こちらにつきましては豊浦町の主要魚種であるホタテの養殖、それに伴ってホタテ貝やロープなどに大量の有害付着物がつくということで、そちらのほうの処分に今まで困っていたということで、そちらを堆肥化施設で処分しているというような状況で、これにつきましては視察資料という形で豊浦町からいただいたものが添付されてございます。あと資料3-2のほうで、洞爺湖町の生ごみ堆肥化処理施設ということで、こちらにつきましては平成15年7月から稼動しておりましたが、施設の老朽化など今後の修理費というもので約2億円ぐらいの負担が見込まれるということで、低コストで処理できる方法として28年に施設の改修工事を実施しております。事業概要の資料としましては添付のとおりでございますが、全体事業費としましては1億800万円、年間運営費としまして約1,600万円、そのほか光熱水費として350万円ぐらいかかっているという状況でございます。

それと、(4) ごみ処理量についてでございますが、こちらは資料1の(2)家庭系及び事業系別収集量としまして、平成26年から家庭系と事業系別に収集量を書いてございます。ちなみに平成26年度の家庭系の合計が4,052トン、事業系が2,500トン、平成29年度になりますと、家庭系につきましては約3,600トン、事業系で約2,000トンというような状況となっております。資料についての説明は簡単ですけれども以上でございます。

○委員長(小西秀延君) 本間生活環境課長。

○生活環境課長(本間 力君) 若干、(3)生ごみ堆肥化の展望につきまして補足させていただきます。資料3のほう3組用意させていただきました。管内の3-1と3-2、豊浦町、洞爺湖町のほうがちょっと聞き取りとしては廃棄物処理費全般的な費用を聞くことができなかったこともあって、なかなか全体の費用対効果という部分がよめないところなのですが、美唄市のほうは私のほうで若干、電話で聞き取りした中でいきますと、ここに記載しているとおり年間廃棄物処理費用が全体で5億円というところで押さえているところなのですが、我がまちと同様に岩見沢市のほうで広域処理を

近隣自治体とあわせて行っているという状況でございます。とりわけこの施設での採算ベースを取るといふよりは、この広域処理がゆえに収集運搬費の高騰もあって、かつごみ総量がふえている実態があるという中でいきますと、この10%、生ごみ処理を行うことで全体のごみ量を減容化することで効果を求めたという中でスタートをしたという経緯で伺っております。考え方としては、単体でその施設でここにも記載したように年間の堆肥の売払いは30万円程度ということで、全くもってこの施設の自体の採算は取れないところなのですが、廃棄物処理費全体の中で今の経費をいかに減容して費用を押さえるかということの着眼点でこの施設を運営しているというようなことを伺っております。簡単なのですが補足させていただきます。

○委員長（小西秀延君） 説明が終わりました。全体でやります。全体でやって、この資料についてのここを説明してくださいということで、ページ指定をして質問していただければと思います。

西田委員。

○委員（西田祐子君） ちょっと単純に聞きたいだけなのですがけれども、資料2のリサイクル率の目標30%の具体的な取り組みということで、コープさっぽろ白老さんで廃食油1,700キロリットル、（株）白老油脂さんでは1,000キロリットルの処理と、つまりコープさっぽろ白老さんのほうが処理をしている量が多いということなののでしょうか。私の聞き違いかと思って、ちょっとその辺どうなっているのでしょうか。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） 実数で申し上げますと、聞き取りの中ですけれども1,700キロリットルです。コープさっぽろ白老さんのほうが多いということで、（株）白老油脂さんのほうが今、実際廃食油の回収というのは約1,000キロリットルということで、コープさっぽろ白老さんのほうが多いという実態でございます。

○委員長（小西秀延君） 西田委員。

○委員（西田祐子君） 私は1番リサイクル率が低いのは廃食油かと思っているのです。だから（株）白老油脂さんあたりにもうちょっとやってもらえるような形で、町としても提案して、この廃食油の回収を上げることがまたリサイクル率につながるのではないかと思うのですけれども、その1点だけお伺いします。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） 平成19年度だと思っておりますけれども、当時エポックサービスさんが社名変更いたしまして現在の（株）白老油脂さんに運営されているという状況でございます。廃食油の計画値としましては1,250トンという目標設定は継続されている状況ではございますが、おおむね達成率とすればBDF（バイオディーゼル）に変換する部分としましては、29年度の実績ですけれども558トン、おおむね5割強の量を達成しているということで、実際その5割程度というものをもっともっと上げていくということもありますので、まちとしてもそういった廃食油の回収につきましては協力していかないとならないという認識は持っているところでございます。コープさっぽろさんは全道規模で配送車の軽油に混合させて独自利用されている状況ですので、それをこ

ちらにという話にはなかなか難しいのですが、(株)白老油脂さんの独自ルートと加えて町内のそういった拠点回収をやれていますので、最近申し訳ありません、そういった周知が不足しているという実態は我々も認識しておりますので、西田委員おっしゃるとおりその部分については可能な範囲で告知のほうを強化してまいりたいというふうに考えております。

○委員長(小西秀延君) 西田委員。

○委員(西田祐子君) 回収の仕方がきちんとしていないとだめだと思うのですが、その辺もうちょっと効果的になるような回収の仕方も町側が積極的に提案してほしいという意味で提案してほしいということを行ったのです。

○委員長(小西秀延君) 本間生活環境課長。

○生活環境課長(本間 力君) 大変申し訳ありません。私が担当の5年前の時点の話になりますが、公共施設が、今、スーパー大きく2カ所ありますけれども、スーパーくまがいさんのほうの廃食油の回収につきましては、拠点を置かせていただいて業務油で使われている部分の回収も協力いただいで設置をしているということで、拠点回収につきましては若干出し入れあるかもしれないのですが、そういった部分を当時設置をさせていただいている経緯があります。そこがきちんと町民に周知がされていないという実態は我々認識しておりますので、まずそこをきちんと町民の皆さんに周知することを徹底すること。または協力いただける回収拠点がまた新たに見込める部分につきましては、そういう部分を情報収集してまいりたいというふうに、まずはあまり周知が徹底されていないところは実施していきたいと考えています。

○委員長(小西秀延君) ほかに質問をお持ちの方いらっしゃいますか。

前田委員。

○委員(前田博之君) 先日の資料つけてもらってありがとうございます。それでちょっと聞きたいのですが、資料2-1の先ほど最終処分場の残余埋立の説明ありましたけれどもわかりました。それで毎年交代でやっているということなのだけでも、一定量出ていますけれども、まず一つに現実的な問題として27年からやっていますけれども、この単価と見積もり合わせをどのようにやっているのか。これは悪いけれども談合でまわしているのか、毎年そういうきちんと制度の中でやっているのか。それと一般の受け入れの単価ありますけれども、それと比較して、どのような単価で入れているのかということです。それとこの2社の処分場の受け入れ年数というか、許容量は何年ぐらいまであるのか。それによって対策しないとだめですね。何年もないはずなのだけでも、その辺まずどうなっているかということです。

○委員長(小西秀延君) 本間生活環境課長。

○生活環境課長(本間 力君) まずこの契約の関係でございますけれども、2社のほうで毎年入札にて札入れした中で落札者を決めさせていただいて対応しているということで、町の契約に基づきまして一定限対応している状況でございます。単価につきましては、焼却灰、焼却不燃物の部分につきましては2万円、それから焼却残渣につきましては1万8,000円ということで、たまたまということではちょっと言葉は適切ではないのですが、一定限毎年価格につきましてはこの同様な額で

推移しているという状況でございますし、繰り返しになりますけれども、入札行為の中で適正に処理されていることは申し上げたいと思います。それと株式会社ケイホクさん、株式会社マルトラさんの埋立の残容量なのですがすみません、今時点できちんとした容量は手持ちで資料がないものですから、次回があれば資料のほうは提出したいと思います。聞くところによりますけれども、どちらかとは言えませんが、1カ所は埋立のほうが一定限推移しておりまして、この数年で満杯になるということです。同社の敷地の中でまたさらに拡充する新設最終処分場の計画を既に用いていますので、今の既存の残容量の推移を見ながら新たな新設の中で対応可能ということで進められるということで、その時点の協議かというふうには思っております。あともう1カ所につきましては、最近、2、3年前の新設でございますので、一定限今後の見込みとしては余裕があるということで、まずもってこの5年、最低限5年、5年から10年の中ではどちらかの業者さんのほうをとって、この民間の施設を活用しながら対応可能というふうに捉えております。

○委員長（小西秀延君） 前田委員。

○委員（前田博之君） 埋立処分場の、これは今、5年から云々と言うけれども、これは公共にかかわることですから、毎年きちんと推移を見た中で計画立てていかないと、また民間入れるのか、またその場になって町でつくるみたいな話にならないので、その辺整理しなければいけないと思うことと、もう一つ2社がどここというのではなくて、経費の面からいけばこれは登別市から運ぶのですね。逆に登別市にも大きい処分場ありますね。そこが登別市のこの焼却灰運搬もそうだけれども、そこと逆に入れて、こういう問題だから地元業者云々ではなくて、そうしたら距離もかなり近いので財政的に安くなると思うのです。その辺は検討してみましたか。私はすべきだと思うのです。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） 当時の積算で、まず白老町として今の最終処分場を嵩上げすること。または新たに新設することは当時、平成27年の段階でご説明したというふうに記憶しておりますけれども、当時は新設の中でも8億9,000万円ほどの費用がかかるということで、ごみ1立方メートルの単価が、今の1万8,000円、2万円でございますと、2倍から3倍という数字になっている状況がございました。そういうことを踏まえますと、今、前田委員のご指摘のとおり、まちが単独で見込むことは非常に費用の部分が集中することもありますし、単価費用も高くなるという想定でございますので民間のほうにという部分がございます。この5年から10年という意味合いでございますと、まちが直接費用対効果を考えますと、新設することは難しいという中で、これから登別市さんの広域処理の中でいきますと、おおむね平成41年度までの長寿命化計画に基づいて動いているという状況がございます。その中でいきますと、この埋立処分場を登別市さんのほうにお借りしてという方法がもしくはその選択肢の中に出てくると思います。現時点でちょっと申し訳ないのですがきちんとした数字が用いていないのですが、収集運搬をかけたとしても、今、地元の産業廃棄物業者さんのほうで受けてもらっているほうが安いという状況の中で登別市さんのほうには持っていないと状況。また受け入れの種類によって若干、今の段階でいきますと制限がかかっているというような、大変ちょっとアバウトな言い方で申し訳ないのですが、そういったこともありまし

て、今、白老町の事業者でやっているという状況があります。今後においてもそういった広域処理の登別市さんとの連携協力の中でも費用対効果、効率よくやれる方法を見極めて対応していかなければならないというふうには考えておりますので、よろしく申し上げます。

○委員長（小西秀延君） 前田委員。

○委員（前田博之君） 民間に町が新設するより単価が高いということで、私が言ったとかは別にして議会の中でその辺 22 年ぐらいですか増設すると評価して、当時網走市かどこかにつくったやつが平米当たり 4 万円ぐらいだったですか。だけどうちでやる時は 7 万円ぐらいという数字が出たのです。とんでもないということで民間委託したらどうだということで、そのままの流れで今回みたく民間委託になってよくなるのだけれども。私が言いたいのは地元優先とか云々ではなくて、この仕事の性質から見れば、今言ったようにぜひ 1 円でも安くして、別な形の財源を使ったほうがいいと思いますので、登別市もあるので、そういう部分で 1 回きちんと調査して単価、今、うちが 2 万円でしょう。もっと安いのであればそういう方法もぜひ考えてほしいと思うのですけれどもいかがですか。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） 今後も直近では申し訳ありません、各近隣の調査はできていないところなのですが、ご指摘のとおり今の段階でいきますと、単価は町が直営で行うよりかは安いというところもございますし、当時の嵩上げで想定容量が約 7,000 トンということでございますし、新設で 1 万 5,000 トンということですので 700 トンペースでいきますと 20 年持つか、10 年持つかというレベルになってきますので、そういったところも見極めながら費用のかけ方、あり方を検討していかなければいけないというふうに捉えておりますので、引き続きいろいろな角度で調査をしながらこの計画のほうを進めてまいりたいというふうに考えております。

○委員長（小西秀延君） 前田委員。

○委員（前田博之君） 今、生ごみの循環型の地域づくりをやって、今、率先して委員会やっているのだけれども、非常にいいのだけれども、そのごみ処理の部分で町のごみ処理計画を見ると、33 ページでいいのですか、10 何ページでもいいのですか。生ごみ処理の促進については、行政と事業者の部分と書いているのだけれども、きょう生ごみ処理について、3 つの市町村の先進地事例が出てきて勉強になるのだけれども、これを町はこれしか考えていないのです。そうですね。だけどきょうは担当のほうで、委員長のほうから指示があったと思うのだけれども、生ごみを実際にやっているときの資料がついているわけです。では町として、この計画は計画なのだけれども、これしかないのに今回資料を出してくれたということに対する、それとこれから議論すると思うけれども非常にいいことだと思うのだけれども、金銭的なことは別です。循環型として、町としては逆に資料をつけただけですけれども。だけど基本計画は、こんな状況しかなっていないけれども、その辺担当に聞いていいのかわからないけれども、政策的にこれは町でどういう扱いになっているのですか。悪いけれども。ここで議論して前向きな意見が出て調査報告を出しても町側がどうなのか、その辺、本間生活環境課長はじめ参加しているということはどれぐらいの認識になって、どう展開しようと

思っているのですか。

○委員長（小西秀延君） それはちょっと町というよりは、今回は私のほうから前回出してもらった資料でリサイクル率が大幅に違うところがあるということで、その原因の主だったところは堆肥化をやっているところがあると。その情報が私たちの議会のほうで少ないものですから、調べられるのなら調べていただきたいということで、だから町がそれに今、向かって走っているとかということとはちょっと別にお考えをいただければということをお願いしたいと思います。

前田委員。

○委員（前田博之君） きょう所管事務調査でこれだけ生ごみの先進地の事例が出ていますけれども、町としての基本計画では若干、現状維持か後退しているような状況なのだけれども、町としての生ごみに対するこの基本計画が今度つくる時期はいつなのか。それに向けてこういうごみの循環型の処理を考えているのかどうか。そういうふうに分ければいいのですか。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） 難しいご質問なのですけれども、26年に改訂させていただきまして、平成35年までのスケジュールということになっております。ご指摘のとおり、決してトンが下がっているわけではなく、このごみ処理に関しましては町民に理解をいただいた中で廃棄物処理法の法律の原点でもありますけれども、行政と事業者、町民に理解があって進めていくというのが原則論でございます。その中でいきますとコンポストを個人でやられている生ごみの仕方、またはきょうお示ししました町、もしくは関係機関の中で、これはPFI等の方法もやられているまちもございますけれども、そういった中で工夫されて選択機能を集約化しているごみ処理ということでございますので、お金の部分での費用を考えますと、できるできないは私どもとしても深くは言いませんが順番が違うということで、今の現状で廃棄物処理の中では問題がございますので、それを解決した中での対応というふうになってくると思いますけれども、それを抜きで考えますと即効性はあるものというふうに考えます。今後の中で時期は当然のことながら、この改訂時期を見測りながらいろいろな角度で費用対効果も見据えながら計画のほうにはタイミングを見て反映すべきというふうには担当課としては考えております。

○委員長（小西秀延君） ほかに質疑をお持ちの方いらっしゃいますか。

吉田委員。

○委員（吉田和子君） きょう資料いただいたのであまりちょっと詳しく理解しないでお聞きするのですけれども。生ごみの関係なのですが、聞き取り調査でコープさっぽろさんとスーパーくまがいのほうの生ごみの量を、これは苫小牧市のほうに処理してもらっていると言っていましたね。

○委員長（小西秀延君） 後藤田生活環境課主幹。

○生活環境課主幹（後藤田久雄君） それにつきましては資料1の部分だと思うのですけれども、ダイエットクックさんとライラックフーズで、こちらについては産業廃棄物になりますので、こちらについては苫小牧市のほうで堆肥化する。企業さんのほうでも資源リサイクルに取り組んでいるということなので、そちらのほうに行っているということでございます。パセオさんのほうでも生

ごみとかというものは、パセオさんだとか、スーパーくまがいさんについては、スーパーで取り扱う生ごみというのは事業系の一般廃棄物ということなので、そちらについては登別市のほうに収集しているという状況です。

○委員長（小西秀延君） 吉田委員。

○委員（吉田和子君） 苦小牧処分と書いているので苦小牧市に出しているということですね。このダイエットクックとライラックフーズのこのごみ量というのは、白老町の燃やせるごみの中に入っていないということですね。登別市にいつているから。それでその他の今、視察、生ごみを堆肥化している施設というのがあったのですけれども、堆肥化にして売れるかどうかということまで考えてしまうと、白老は農業関係が少ないということで堆肥にしても売らないということも大きな要因になっていると思うのですが、どちらが上下なのか。堆肥化しても何だかの形で埋めるか何かしなければならぬのか。それとも誰か町民に分けていってもそれでも間に合わないのか。その堆肥化をするための経費をかけてでも生ごみを減らしたほうがリサイクル率が上がるのか。それとも堆肥を売れないけれども、町民に分けてでもいいからそういうふうにしたほうがごみ量として減ってリサイクル率もよくなって経費とのバランスがどうなのかというのは、まだ出されたばかりで考えないでしょうし。それともう一つは町民から出される生ごみの量がわからないということなのですが、これは今後1番リサイクルを進めやすいのは生ごみを別に出すということだと思うのです。町民の方々も悩まずに出せるのではないかと思うのですけれども、その町民から出される家庭系の29年度でいくと2,988トンのこのごみの中でどれぐらいの割合の生ごみが占めるのか。それを登別市に持って行って燃やしてもらった経費と、それから白老町で家庭系の生ごみ、それから事業者の生ごみを一括して町で、事業者はもちろんお金取っていいと思うのですけれども、町民からもしかしたら取るような形になるかもしれないけれども、それはごみの袋で処理するとか、そういう堆肥したものを今後つくり上げていくことができないかどうか。その点、ちょっとお伺いしたいのですけれども。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） まず資料にお示ししましたダイエットクックさんとライラックフーズさんのほうは、繰り返しになりますけれども産業廃棄物処理ということで、従前経過を申し上げますとバイオマス燃料化施設で受け入れしていた時期もあったのですけれども、あくまで一般廃棄物処理の中で合わせ産業廃棄物ということで道の許可をいただいた中で処理をしていたということでやっていた経緯はございますが、もともとこちらのほうから食品リサイクル率の向上ということで、実際バイオマス燃料化施設で処理したとしても食品リサイクル率のカウントにはならないということがあって、企業努力として、努力というのは語弊がありますけれども、企業さんのほうの取り組みとして食品リサイクルの向上という目標を掲げられまして、既存でやります苦小牧市の処理施設のほうで現在リサイクル率向上のためにこちらで処理をしているという経緯ですのでご承知いただければと思います。

それから先ほど堆肥の売払いの部分かどうかという、その販路が先かというようなお話かと思

いますけれども、美唄市さんのほうで説明したとおり、肥料の売払い年間 30 万円ほどしか、これはほかの地域でこれ以上あるところは押さえきれではないませんが、おそらくという言葉は大変語弊がありますけれども、施設全体の維持管理費をカバーできる売り払いには間違いなくならないという現状にあります。どちらかという、ごみ総量全体で資料 1 の下段に示しているとおりの可燃ごみのざっくりとした話が 7 割が生ごみというふうに捉えておりますので、全て一概にこれが 7 割落ちるかどうかは計量を実際きちんとした場合にはおそらく誤差が出るとは思いますが、そうすることによって可燃ごみ自体が減容化できるということになります。そういう意味では、ごみ処理総量を生ごみ処理を別枠でリサイクル率を上げるためにすること、イコール、家庭系の可燃ごみが減容化できるということでごみ処理料が落ちることでイコール費用が減ることになりますので、どちらかという堆肥を売ってお金を稼ぐというよりは、施設のごみ処理を減容化しまして対応すると。ただ、実際燃料化施設の関係ございますので、言っていることが逆になるような言い方になりますが、そういう捉えとすれば今現状の生ごみの処理にしては、そういう観点のほうが強いかというふうに思います。ちなみになのですが、肥料をつくって売るよりは、町で言われているように RDF、産業廃棄物でいけば RPF というような捉えでいきますと固形燃料のほうが高価というふうにいけば、まだまだ肥料を売るよりは収入が得られる可能性はあるというふうには捉えております。

○委員長（小西秀延君） 吉田委員。

○委員（吉田和子君） 白老町のまちの構成からいって堆肥にするというのは私はほとんどゼロに近いというふうに考えていいと思います。ただ、先ほど言ったように年間の廃棄物処理費用が 4 億 4,900 万円かかっているという計算でいくと、7 割が生ごみだというふうに考えると、全部それを登別市に入れなくなると向こうが 24 時間燃やすために持っていったり、まただめだからまたやめてまた持っていくというようなことで迷惑もかけていますけれども、本当に今後の将来のリサイクル率、それからごみにかかる経費を考えの中で経費的にどうなのかということは数値的に押さえておく必要は私はあると思います。私たちが今、もし委員会で生ごみの堆肥化を見に行っても白老がやらないものを見に行ってもしょうがないですし、もしそういう前向きなもので可能性として 7 割のうち 3 割でも処理できるものがあると、それはまた経費として違ってくる。4 億 4,900 万円のうちの 7 割といたら、大分減ると思います。かなり違うのではないかと思いますので、そういうことの堆肥をしたものが私たちもちょっと押さえていったらいいのではないかと。そういう思いで、今、話したのですけれども。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） 美唄市さんの資料につけています白老町の全体の廃棄物処理費 4 億 4,900 万円なのですけれども、これは誤解のないようにいただきたいのですけれども、これが可燃ごみの量が 7 割減ることで、この 4 億 4,900 万円の 7 割が減ることにはなりませんので、あくまで起債償還、元金、利子も含めた、28 年度の費用をやっております。当然のことながら施設、施設の処理ラインの焼却施設、それから分別施設、そういった部分を登別市さんとの広域の分担金

もありますし、既存の燃料化施設の維持管理費もございますので、そこを踏まえて、全体的にはどのぐらいかという検証はしなければいけないというふうには捉えておりますけれども、おそらくその7割までの費用には全くもって下がることはないのですが、ただリサイクル率を向上すること。

結果としてこの費用の一部が軽減できるということも含めますとまちとしての一般廃棄物処理は責務でございますので、当然のことながらできるだけ費用をかけないでやるということが特に今、バイオマス施設もあるように今後も廃棄物処理費、人口減少見合いでいけばどのぐらいの規模で、どのぐらいの費用でということは見極めながらやっていかなければいけないと考えておりますので、答えはなかなか申し訳ありません、今の時点でこのスキムでいけばこのぐらいの費用というシミュレーションはまだ出せませんが、今後いろいろな角度で我々としても勉強していきたいと考えております。

○委員長（小西秀延君） ほかに質疑ありますか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○委員長（小西秀延君） 暫時を休憩をいたします。

休憩 午後 2時18分

再開 午後 2時20分

○委員長（小西秀延君） 休憩を閉じて会議を再開いたします。

調査事項、2、先進地視察についてということで、前回所管事務調査終了後、委員の方から、これについてちょっともっと深く勉強してみてもどうかということのご意見をいただきまして、きょうの調査の中にも3カ所ぐらいちょっと先進地というか、リサイクル率の高いところ、近場のところの資料を取り寄せていただいて皆さんに見ていただいたのですが、こういう先進地の視察をしてみてもどうかということで私も考えまして、この項目をつくらせていただきました。これについてご意見あります方はどうぞ。

西田委員。

○委員（西田祐子君） 先進地の視察がいいかどうかちょっと私判断しかねるところですけども、それを見るなら白老町の今、言っていた翔和農材（有）さんとか、（株）白老油脂さんとか、それとか事業系のごみをどういうふう処理しているとか、私はそちらのほうが見てみたいかと。こちらの先進地のほうを見て、では白老町でそれを事業としてやっていけるのかどうかということ考えたときに、見に行っても果たしてどうなのかと。白老町に应用できるようなところだったらいいとは思うのですけれどもというのが私の思いです。

○委員長（小西秀延君） ほか、どうでしょうか。今、担当課からの説明では現状バイオマスも抱えていまして、登別市さんと広域でごみ処理をやっているという現状を鑑みると、近々には生ごみの堆肥化というのはすぐできる問題ではないのかというご意見がございましたが、将来的には有効な手法の一つではあるというようなご意見がございました。また、ごみ処理の計画にもある程度、それも考慮していかなければならないのかということでございますけれども、その辺を踏まえてど

うでしょうか。

大淵委員。

○委員（大淵紀夫君） ちょっと私が質問しなかったのは、誰か先ほど言ったけれども、このことについて言えば町の方法が全く何も見えないような気がするのです。現状をどうするかということにしか何かなっていないような気がしているのです。この問題というのは、それこそ本当に全町民を巻き込んだ運動にならない限り、なかなか成功しづらいと思うのです。それと考え方はやはり基本は地球温暖化をどうするのかというようなどころから本当は入っているはずなのだけれども、具体的な部分でどんどんいってしまうものだから、私はそういうまちの考え方がどこに密着しているのか。そこら辺がどうもまだ固まっていないという気が実はしたのです。だから逆に言えば先進地を見に行ったり、今、西田委員が言ったようなところを見て、ではどうあるべきかという議論をして議会が提案できるようなものがつくっていけないのか。例えば、今、太陽光発電どんどん出ていますね。あれも一種の循環型社会の、景観の問題だとかいろいろなことも出ているのだけれども、例えば風力発電なんかは占冠すごいいいですね。そういう循環型の社会をつくるというのは地球をどうやって守るかというようなどころから出ているような気がして私はしょうがないのです。だから今の状況というのは、何かそういうものが町としてはあまり考えていないでやっているような気がしてどうにもならないのです。だからそこら辺、もうちょっと方針固まるというか、どうするのかと。何か最終処分場もう1回見ればもうちょっと埋められるのではないかというような、それは何か変ではないかと私は思うのです。批判をするというのではなくて、ではその次どうしていくのかというあたりを我々が議論して提案するというようなものにできないものなのかと。そのための視察だったら私は構わないとは思っています。ただ、言うように現状把握も必要だし、その上でそういうふうになっていかないと。ごみ処理計画が出ているわりには何か具体的なものが何も出てこないという気がしてどうにもならないのです。

○委員長（小西秀延君） 吉田委員。

○委員（吉田和子君） 私もずっと、あまり最近バイオマスができてから一般質問もしていないのだけれども、ごみステーションの数の問題が前はあったのです。経費をかけないという意味では。そういったことでごみステーションを減らすとか、いろいろな方向性が出されたのだけれども、バイオマスができたことで何か全部ゼロになったようなところがあるような気がするのです。だからこれから登別市だと先ほども大淵委員がおっしゃったように、これから先20年も30年も絶対動いていくとは限らないわけですね。でもごみはずっと人がいる限りは出るわけです。だから先ほど言ったように処分のもと、こういったものをつくるのがどれだけ経費の差があるのか。将来的に分別はどこまで進めるためには30%とっていましたがけれども、30%するためのものが何か出てきているかといったら何もない。だからそういったことから考えると、私は白老町のごみ処理、今は登別市に委託していますけれども、それが将来的になくとも白老町のごみ処理がある程度できる。ましてや今度室蘭市に運ぶとか、そういうことになったらすごい経費がまた倍かかるような気がするのです。だからそういうことから含めると地元で自分の自前のところではできない方法はないも

のなのか。そういったごみの堆肥化とか、それから処分ができるものができないのかどうなのか。これからごみ処理計画は35年までと言っていましたね。だから全然そういったことを入れないのか。この10年間は登別市に委託していくものなのか。その辺、私たちもしっかりして、今後高齢化のまちでごみの処分のあり方、それから高齢化でのごみの収集のあり方、そういったことも含めてやっていかなければならないと思いますので。ごみの分別に努力している町村、ごみを減らすことに努力をしているところの視察も今後必要になるかもしれませんが、今のところはそういった機械でもし処理ができるのであればそういったところをきちんと見て、将来的に財政的なものが許せば考えるということも必要なのかというふうに思いますので。私は調べていただいて白老町が挑戦できそうなものがあるのであれば見て、私たちも勉強して挑戦していくということも必要なのかというふうには思います。

○委員長（小西秀延君） ほかの方ご意見ありますか。

及川副委員長。

○副委員長（及川 保君） 今、皆さんから出された意見に私も実は同じ思いでおるのですけれども、白老町が生ごみ対策を資源化するという取り組みというのは非常に難しい部分があるのだというの重々皆さんもおわかりのとおり家畜のふん尿の処理で多分、かなり手一杯の状況で、まちのほうとしてもなかなか動きづらい状況にあるのだというふうには実は考えていたのです。ただしかし、今、大淵委員、吉田委員おっしゃっていたように、将来登別市とのごみ処理問題については合意ができていますのですけれども、本当に今、将来的にはどういうふうになっていくというのは見込めない部分があるわけです。クリンクルセンターがずっと永続的に稼動するという話にも当然ならぬだろうし、そのときにしっかりとしたまちとしての取り組みが非常に大事になってくるのだというふうにも私も実は考えております。ですから大淵委員がおっしゃったように議会が動かないとなかなか、まちが単独で何もなくて動く状況に非常にないというのは十分わかるものですから、議会が何か先に出てしっかりとした提案ができるような形ができれば本当にいいのだけれども。

そういう取り組みであれば、今回視察を含めてしっかりと勉強して調査しながら、今回だけのことでだけではなくて、長期にこれをとおしてしっかりと提案できるようなものにしていけたらいいというふうに思います。

○委員長（小西秀延君） ほかにございますか。

吉谷委員。

○委員（吉谷一孝君） 吉谷です。今までの説明を聞いていた中で、これは事業化しても要は採算取れる事業ではないということなのですね。今までの説明の中では堆肥化しても。ということは、これで要はリサイクル率だとか、CO₂の削減率だとかということの効果ということで、この事業をやって白老町にどれだけ事業として金銭的にメリットが出てくるかということというのはないという私の認識だったのですけれども、それを考えると基本的な考え方が違わないと、このことを視察に行っても何をしていても意味が違ってくるのかという理解なのです。だからCO₂の削減だとか、ごみの減量化とかということをリサイクル率の向上ということだけで、あくまでもそれに対して何

か経費削減になるとか、そういうことはまた別の問題として理解してこの視察に臨むということであれば、私はこれは意味があることだし、やるべきことだというふうに思うのですけれども。そこに今の白老町の状況を考えてどうするかということとはまた別で考えていかないといけないのかというふうな理解でいました。そういった意味で考えるのであれば、この視察とかそういうことの意義はあるかというふうに理解しています。

○委員長（小西秀延君） 大渕委員。

○委員（大渕紀夫君） 大渕です。それは、今、吉谷委員が言われたのは先ほど吉田委員が言ったことなのです。それはどういうことかということ、燃やせるごみのうちの75%が食品残渣です。それを運ばなくてよくなるわけでしょう。それを出せと言ったのだけれども向こうはわからないと言ったのです。プラスの要素というのはすごくあるのです。例えばこれは30万円しかないものなんて誰も事業なんてやらないのです。ただここから登別市に運ぶ燃やせるごみの量が、例えば重量換算で75%減ったとしたら、ものすごい運搬料下がるでしょう。それがどれだけかと吉田委員は聞いたのだけれどもわからないと言ったのです。それがわかれば、この施設をつくるよりも運搬料が減れば、それはどうしてかといったら総体の枠でいえば起債から何からみんな入っているからだめだけれども、運搬料から燃やせるごみの量の食品残渣がなくなった分だけでどれだけの運搬料が減るかということが正確にわかったら、もしかしたらそれが上回ればこれはどうですか、美唄市がやっているのはそのためにやっているでしょう。10%のごみが減ったから。だからこの数値が出てわからないといったものだから私はもうこれは質問してもだめだと思って実を言えばやめたのです。ただこれは美唄市で本当はこのことによって燃やせるごみというのは減ったわけでしょう。それによって運搬料や経費がどれだけ減っているかということなのです。それがわからなかったら何の、それは30万円なんかで今、言われたようにやるわけがないのだから。だからそこは全然関係ないので。そこら辺を本来わからなかったら本当におかしな話でしょう。やっていること自体がおかしいのです。議論していること自体。だから本当は吉田委員が先ほど聞いたことがきちんとわからないと。食品残渣を肥料化するという意味は全くないのです。ただもしかしたらものすごく減るかもしれないのです。75%が食品残渣だというのだから。もちろんあれはボリュームだから、重量だけでないから。運ぶときはパッカー車、ボリュームも関係あるから、容積も関係あるから、その関係でいけばどれだけ減るかは私はわからないけれども。だから資源ごみと食品残渣を減らせば燃やせるごみは極端に減るのです。それははっきりしているのです。だからそこら辺が私が言っているのは、もうちょっと言及してやれば、ここでやるのは吉田委員言われたように本当に1年間やるだけの中身が、先ほどちょっと雑談で言っていたけれども、これから高齢化社会になれば必ずごみは個々収集、これは考えなければだめになります。ごみステーションに持っていくのではなくて、個々収集考えなくてはだめでしょう。もう外国はみんなそうだから。だからそういうことを含めて議会が考えていかないと面白くも何ともないです。ただ文句ばかり言っているのではと思うのです。

○委員長（小西秀延君） 前田委員。

○委員（前田博之君） 非常に難しいのです。ただ、総務文教常任委員会の調査事項は、循環型の

地域社会づくりでしょう。対象が大きいだけでなく、でききょうは、生ごみにいってしまったのです。だから、循環型は非常に大きいですね。バイオマスも何も当初いいのです。私は事業自身否定していないのです。だけど途中いろいろなことがあってああって、私はもう1年実証実験やれといえ塩素のやつも0.3が1.何ぼだといったやつもきちんと解決できたと思うのだけでも、それは議論やっただけでも。そういうふうに逆に何を委員会が目指すかということは、バイオマスがいいとかではなくて、あそこも今の流れでいけば生ごみを今の機械を使って生ごみを発電して、容量は別にして、逆に日本製紙に売却できる可能性もあるのです。買う買わないは別にして。だからそういう部分で私が言いたいのは、本当にうちが今、目指している循環型地域社会づくりはどこに焦点を当てて議論するかということではないと漠としてしまいます。だから生ごみで整理していくというのなら何も視察でいいのだけでも、その辺の整理の仕方です。そうすればもっと今言ったように太陽光だとか、いろいろな形の循環型の施設なり方向性がありますね。そうすれば逆にそういう全体的な今、循環型の社会が日本でもどういう方向にしているかということの部分も勉強するなり、それなりの知見の人を呼んできて勉強するとか、それでどこに絞るか。

そういう部分も出てくると思うのです。今まで皆さんの意見を聞いたら方向性は同じなのだけでも、どう絞るかということだと思ふのです。だから生ごみだけでいいのなら、生ごみだけいいのだけでも。どこに絞るかということ整理していかないと、漠として皆さんの考え方が違ってくるのかと思うのですけれどもどうでしょうか。

○委員長（小西秀延君） 今回ちょっと生ごみをクローズアップさせてもらいましたけれども、前回の流れの過程で可燃ごみの70%以上は生ごみであるというお話からちょっと発展していったという流れもあるのですけれども、先ほど大渕委員からもお話ありましたとおり運搬費の関係も出てくると思います。登別市でやっている処理量の関係も出てくると思います。白老町全般でかかっている4億5,000万円の流れとはならないですけれども、これは担当課が言っていましたけれども。全体的な経費でいったら可燃ごみの7割に関係してくるわけですから、かなりの影響力はあるのかというふうには思っています。それは売れる額は大したあれではないでしょうけれども。ここでちょっと整理させてもらいたいのですが、皆さん全員から意見もらいましたけれども、やらないほうがいいのではないかという人が今回いないみたいなのです。これは将来的な話になるかもしれないけれども、町もごみの処理の関係でどう動くかというのはあまり明確になっていない部分がやはりあると思うのです。いつも答弁いただくのは分別の意識の改善とか、ちょっと画期的な改善につながっていくかという問題が出てきていないので、我々がそれを探ってみると。それが委員会の所管事務調査の役目の一つでもあるかというふうに思うのです。これがきちんとまとまって町側に提言できるかできないかは別にして、こういうふうな考え方はできませんかという提案をできればこれは1番いいかと思ふのです。これは6月定例会で所管事務の報告を終えるという形ではなくて、私たちも調査、勉強をしてちょっと時間をかけて皆さんで議論を深めたいと思ふのですが、そういう考えでよろしいでしょうか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

○委員長（小西秀延君） 皆さん異議がないということでございますので、具体的にいうと視察もかねて今回ちょっと3例を出していますが、また西田委員からも町内で循環型の社会に対して貢献している企業もあると、そういうところも見てみたいというお話もありましたので、これはちょっと相手のあることです。担当課とうちの議会事務局と委員長、副委員長で相談させてもらって、どういうふうな動きをしていったらよろしいか案をつくってみたいと思うのですが、ある程度お任せをいただけるでしょうか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

○委員長（小西秀延君） それでは、そのように取り図りたいと思います。

本日の調査事項、3、委員会意見のとりまとめということで、本日予定しておりますが、前回こういう形で進めますと言ったものですから、これを入れさせていただいたのですが、今までの議論でちょっと視察もかね、調査ももっと深くやりたいということでございますので、とりまとめのほうはまた改めてということにさせてもらいたいと思うのですがよろしいでしょうか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

○委員長（小西秀延君） それでは、本日予定していた調査は終了いたしたいと思いますが、何かございますか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○委員長（小西秀延君） それでは、所管事務はこれで終了させていただきたいと思います。

もう1点、本日協議事項があるのですが、前回皆さんにちょっとお願いしていました、30年度の総務文教常任委員会の年間予定についてであります。皆さんに中身は白紙で渡したのですが、何もなくて一つ一つ決めていくとまたすごく時間がかかるということで、委員長案として事務局につくってもらったのですけれども、一応案をつくらせてもらいました。このような形で1年間進めてみようかと思っているのですが、皆さんからここをもっとこういうふうにしたほうがいいのか、考え方を全然もっと変えたほうがいいのか、お考えをまとめていただいている方もいらっしゃると思いますので、ご意見を賜ればと思います。

暫時休憩をいたします。

休憩 午後 2時45分

再開 午後 2時50分

○委員長（小西秀延君） 休憩を閉じて会議を再開いたします。

このようなスケジュールを立てましたが、何もなければ、これを総務文教常任委員会の案としてもっていきたいと思いますが、よろしいですか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

○委員長（小西秀延君） それでは、5月31日までということでしたが早めに決まりましたので、そのように提出をさせていただきたいと思います。

本日、協議のほうは以上ですけれども、協議のほうも何かもんでおくことはありますか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

◎閉会の宣告

○委員長（小西秀延君） それでは、以上もちまして総務文教常任委員会を閉会させていただきます。お疲れ様でした。

（午後 2時51分）